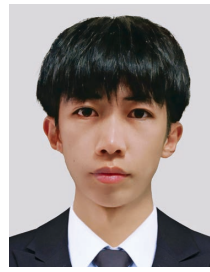


● シリーズ 私の見た日本 Vol.245

日本の街路と安心感について

肖 浩源 (ショウ コウゲン)

中国広州市生まれ。2023年4月から2026年3月まで名古屋工業大学大学院工学研究科博士後期課程在籍。2026年3月修了、同年、近畿大学工業高等専門学校総合システム工学科都市環境コース助教着任



日本に惹かれた理由

私が日本に強く惹かれるようになった原点には、建築があります。家族が建築設計に携わっていたため、私は幼い頃から建築を身近に感じながら育ちました。図面や模型が日常の中にあり、建築は特別なものではなく、ごく自然に存在するものでした。その影響もあり、大学では迷うことなく建築学を専攻しました。

大学1年生の実習では、実習先の設計事務所において、毎週、世界各国の著名な建築家の作品を学ぶ機会がありました。その中で出会ったのが、安藤忠雄氏の建築です。それまで見てきた華やかな建築とは異なり、装飾を極力排し、光と影、そして打ち放しコンクリートという限られた要素だけで空間を構成するその姿に、私は強く心を惹かれました。いくつか実際に日本でその建築を体験してみたい。その思いが、日本という国への関心へとつながっていきました。

建築の洗礼を受けた瞬間

実際に日本を訪れ、安藤忠雄氏の建築空間に足を踏み入れたとき、その感動は想像をはるかに超えるものでした。写真や図面で見えていたはずの空間が、実際にはまったく異なる体験とし

て迫ってきました。

静かなコンクリートの壁に差し込む光(図1)、時間とともに変化する影(図2)、そして余白のある空間(図3)。その中に身を置いたとき、建築は単なる「形」ではなく、人の感覚に直接働きかける存在であることを強く実感しました。それは、まるで建築そのものに洗礼を受けたような体験でした。

この経験を通して、私は日本で建築をより深く学びたいと考えるようになりました。そして将来は、日本でさらに建築や都市について深く学び、専門的に研究を続けたいと考えるようになりました。

街を歩いて気づいたこと

しかし、日本に来て感じた魅力は、有名な建築作品だけではありませんでした。むしろ、日常の中で何気なく歩く街路こそが、私にとって印象的な存在となりました。日本の街は全体的に清潔で整然としており、歩いているだけで安心感を覚えます(図4・5)。特に印象的だったのは、夜の街の雰囲気です。夜遅い時間に街を歩いていると、コンビニエンスストアの明かりや、適度な街灯によって空間がやわらかく照らされ、人の気配が途切れることはほとんどありませんでした。私は何度も

人で夜道を歩いたことがありますが、不安を感じることはほとんどありませんでした。

このような安心感は偶然生まれるものではなく、街路のつくり方や環境の整え方によって生み出されているのではないかと感じるようになりました。日本に留学しようと思った理由には、このような街路空間の清潔さや安全性の背景を、自分の目で確かめたいという思いもありました。

広州の城中村で育って

私は幼い頃、中国・広州の城中村で育ちました。城中村とは、都市の急速な発展の中で、もともとの農村地域が都市に取り込まれながらも、そのままの形で残された空間です。

人口流入の増加に伴い、住宅需要に応えるために建物は高密度に建てられ、狭い路地が複雑に入り組んだ都市構造が形成されていきました(図6)。その結果、採光や通風が十分でない場所も多く、街全体がやや雑然とした印象を持つことがあります(図7)。

特に夜になると、路地は暗く、人通りも限られるため、不安を感じることもありました(図8)。一方で、城中村には人と人との距離が近いという魅力もあります。狭い路地の中で自然と会話が生まれ、生活の気配が強く感じられる空間で



図6 広州の城中村に見られる狭い路地



図7 広州の城中村の街並み

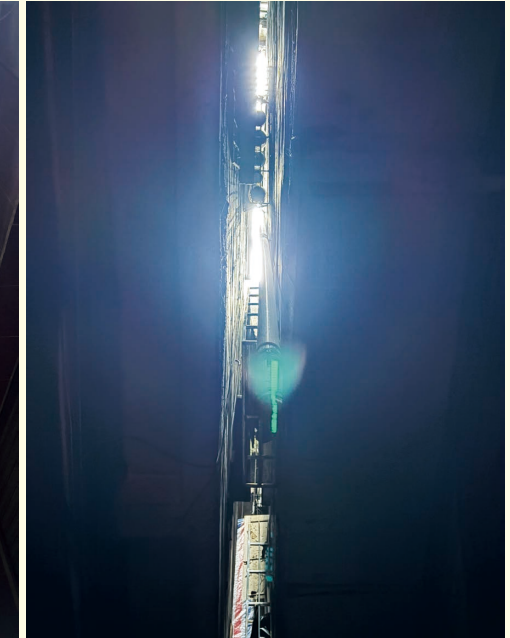


図8 広州の城中村における建物が密集した様子

もあります。しかし、そのような活気を持ちながらも、より安全で快適な環境へと改善していく必要があると感じてきました。

日本と中国、街の違い

日本と中国の都市空間を比較すると、いくつかの違いが見えてきます。

日本の建築や街路は比較的小さなスケールの中で構成されており、周辺環境との関係が丁寧と考えられているように感じます。建物と街路、そして人の動きが自然につながり、全体として調和のとれた空間が形成されています(図9)。それに対して中国では、都市開発の規模が大きく、高層住宅や大規模な建物が集中的に建設されることが多くあります(図10)。また、実際

のプロジェクトでは不動産販売や商業運営などの要素が強く求められるため、建築そのものの空間性だけでなく、経済的な側面が重視される場面も少なくありません。

こうした違いは単純な優劣ではなく、それぞれの社会的背景や発展段階によるものですが、街路空間のあり方や人が感じる安心感には大きな影響を与えていると感じました。

研究を通して見えてきたこと

このような問題意識から、私は現在、博士課程において「都市街路空間における安全感知評価」をテーマに研究を行っています。街路の照明、清潔さ、周辺の建物、緑化、人の存在など、さまざまな要素がどのように人の安心感に影響

を与えるのかを分析し、その仕組みを明らかにしようとする研究です。日本で生活する中で、これらの要素が非常にバランスよく整えられていることに気づきました。例えば、街灯の配置や明るさは過度ではなく、しかし不安を感じさせない程度に調整されています。また、道路や歩道の清潔さ、適度な人通り、店舗の存在などが組み合わさることで、街全体に安心できる雰囲気生まれていると感じます。

こうした複数の要素が重なり合うことで、人は無意識のうちに「安全だ」と感じているのではないかと考えています。

これから目指したいこと

日本での経験を通して、建築や都市は単なる形や機能ではなく、人の感覚や行動と深く結びついていることを改めて実感しました。今後は、日本で学んだ街路空間の考え方や安全感の形成要因を、自分の国の都市環境に応用していきたいと考えています。特に、城中村のような高密度で複雑な空間においても、人が安心して暮らせる環境を実現するために、どのような改善が可能なのかを探っていききたいと思います。

単に建物を整備するだけではなく、人の行動や地域の特性を踏まえた上で、より良い街路空間をつくること。それが、これからの自分の目指していきたい方向です。日本での経験を大切にしながら、より良い都市空間のあり方を探り続けていきたいと考えています。



図1 和美術館

図2 和美術館

図3 ベネッセハウス ミュージアム

上/図4 下/図5 日本の街(名古屋)



図9 日本・地中美術館(入口)



図10 中国・和美術館(入口)